

大学通信教育における人材育成方針と教育観の研究

—— 教育代表者のメッセージ分析から ——

小暮 克哉 古壕 典洋 山鹿 貴史

キーワード：教育の内部質保証 学修支援専門職養成 人材育成 教育観のねじれ 集合と分散

1. 問題の所在と背景

1. 1 学修者本位の教育の実現に向けた政策動向

2022年10月に大学設置基準が改正された。今回の改正は「学修者本位の教育の実現」の考え方を質保証システムへと反映させる方針を重視したものとされている（文部科学省 2022a）。

この改正の特徴は、「3ポリシーに基づく「学位プログラム」の編成とそれを基礎とした「内部質保証」による教育研究活動の不断の見直し」（文部科学省 2022b）としている点に象徴されている。その実現に向けて「指導補助者」とその役割の明文化、「指導補助者」を含めた教職員のSD・FD関係の規定の集約化などまで踏み込んだ指摘がなされている点が、今回の改正のポイントとして挙げられる。

こうした点は、通学課程の大学だけに限定されるものではない。とりわけ「指導補助者」に関しては、通学課程に先駆けて「メディアを利用した授業（以下、メディア授業）」において大学通信教育が主導的に活用してきた歴史がある¹。さらに言えば、大学通信教育のみに存在する授業の方法である「印刷教材等による授業」では、「添削指導員」等の「学修支援専門職」が活用されてきた²。

各大学の教育・学修の質を保証するために、教員と学修者との橋渡しをするのが「指導補助者」を含めた「学修支援専門職」の役割である。今改正が、そうした人材に対する研修の実施とその一層の充実を重要視しているのであれば、そこにおいては3ポリシーの他にも、建学の精神や教育の理念といった、各大学の人材育成方針が反映される必要性がある。

1. 2 本研究の問題意識と目的、調査・分析の対象と方法

建学の精神や3ポリシー等を踏まえつつ、大学が「どのような人材を育成したいのか」という教育観や、社会的使命をどのように引き受けたのかという痕跡や表明は、代表者のメッセージに現れる³。そのメッセージの内容は、大学の人材育成方針や、その方針を支える教育観を反映したものであると考えられる。こうした社会的使命や人材育成方針・教育観を社会に向けて発信する重要な役割を持つもののひとつに、大学

のウェブサイトがある。

本研究の目的は、大学通信教育がどのような人材育成方針や教育観を掲げているのかという点を明らかにすることである。そのために大学ウェブサイトに掲載されている「代表者」（通信教育課程長や学長、学部長等）の「メッセージ」（挨拶文）に着目し、調査ならびにその分析を行うこととする。「メッセージ」に着目するのは、「言葉」とは見方や考え方といった人間の認識枠組みを規定するものであり、言葉にはそれを用いる者の認識が現れるためである（Rorty 1967）。

分析の対象校は、大学通信教育を実施している 42 大学の通信教育課程とし、それらの公式ウェブサイトに掲載されている、通信教育課程長や学長、学部長等の代表者メッセージを収集した⁴。

分析の方法は、まず「ユーザーローカル テキストマイニング」による頻出語の抽出を行った⁵。それらの単語の頻出度や係り受け解析の結果から、大学通信教育の全体的な代表者メッセージの傾向を明らかにした。さらにメッセージ本文を通読することで、そうした傾向が大学ごとにどのような表現や文意で表出しているのかを把握した。

2. 調査結果

全 42 大学のうち、通信教育課程ウェブサイトに課程長や学長等の代表者のメッセージを掲載しているのは 33 大学であることが判明した。

表 1 はメッセージの掲載内訳を示している。表 1 を見ると、全体的に課程長等よりも学長等のメッセージの方が長文の傾向にあるということが明らかとなった。

表 1 メッセージの掲載内訳

調査対象 大学数	WEB サイト 掲載の有無	メッセージ 発信者の役職	メッセージ の文字数
通信教育 実施大学 (42 校)	メッセージあり (33 校)	課程長のみ (10 校)	最大：917 最小：235 平均：609
		学長のみ (13 校)	最大：1,345 最小：17 平均：629
		課程長・学長両方 (10 校)	最大：884 最小：259 平均：581
	メッセージなし (9 校)	—	—

3. 分析結果

3. 1 課程長等のメッセージのテキストマイニング分析結果

課程長等のメッセージ本文(合計 12,418 字)をテキストマイニング分析した結果が、以下である。

■ 名詞	スコア	出現頻度	■ 動詞	スコア	出現頻度
通信教育	336.08	51	学ぶ	90.11	55
学生	29.84	34	できる	1.91	39
課程	205.13	33	持つ	0.35	11
大学	16.28	32	くださる	0.24	11
学び	125.69	31	いく	0.24	11
本学	203.81	27	目指す	2.42	10
教育	34.97	24	おる	0.23	8
科目	53.09	22	思う	0.04	8
スクーリング	112.40	19	受ける	0.64	7
目的	13.09	19	続ける	0.48	7
取得	27.51	18	いただく	0.35	7
学習	27.00	18	つける	0.20	7
資格	18.30	18	行う	0.20	7
皆さん	4.92	18	考える	0.14	7
入学	21.62	17	変わる	0.19	6

■ 形容詞	スコア	出現頻度	■ 感動詞	スコア	出現頻度
深い	0.35	4	ありがとう	0.00	1
高い	0.10	4	---	---	---
幅広い	2.01	3	---	---	---
広い	0.33	3	---	---	---
新しい	0.08	3	---	---	---
強い	0.04	3	---	---	---

図 1 課程長等のメッセージ本文の単語出現頻度

図 1 は「課程長等のメッセージ本文の単語出現頻度」の結果である。名詞では「通信教育 (51 回)」、「学生 (34 回)」、「課程 (33 回)」、「学び (31 回)」、「本学 (27 回)」等の単語が多く析出されたほか、「スクーリング (19 回)」、「取得 (18 回)」、「資格 (18 回)」といった授業の方法や学修の目的に言及した単語も多く見られる結果となった。動詞では「学ぶ (55 回)」、「できる (39 回)」が頻出語となった。

■ 名詞 - ■ 動詞

名詞 - 動詞	スコア	出現頻度
大学 - 学ぶ	1.61	9
通信教育 - 学ぶ	1.00	7
課程 - 学ぶ	0.75	6
身 - つける	3.75	5
身 - 付ける	4.00	4
伝統 - 守る	3.00	3
充実 - 図る	3.00	3
成長 - 続ける	1.50	3
育成 - 目指す	1.09	3
目的 - 向かう	2.00	2
法学 - 向き合う	2.00	2
人生 - 変える	2.00	2
関心 - 寄せる	2.00	2
世界 - 広がる	2.00	2
造形 - 関わる	2.00	2

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
機会 - 提供	3.33	5
資格 - 取得	1.58	5
本学 - 通信教育	0.58	5
学生 - 皆さん	1.05	4
教員免許 - 取得	1.05	4

図2 課程長等のメッセージ本文の係り受け解析

また、図1の動詞で見られた「目指す(10回)」、「つける・付ける(合計7回以上)」、「続ける(7回)」といった単語は、図2の係り受け解析の結果、「育成一目指す(3回)」、「身(に) - つける/付ける(合計9回)」、「成長-続ける(3回)」といった形で表れており、課程長等のメッセージに人材育成方針への言及がされていることが判明した。

さらに、図2の「名詞同士の係り受け」においては「機会-提供(5回)」や「資格/教員免許-取得(合計9回)」という単語同士の繋がりがあっても明らかになった。「教育の機会均等」や「資格(教員免許状)の取得=専門資格者養成」というのは、大学通信教育が制度化以降、一貫して担ってきた役割である。今回の解析結果は、今日の課程長等のメッセージにも、こうした大学通信教育の伝統的な価値観や教育観が表出している証左の一端を示す結果となった。

3.2 学長等のメッセージのテキストマイニング分析結果

学長等のメッセージ本文(合計15,204字)をテキストマイニング分析した結果が、以下である。

■ 名詞	スコア	出現頻度	■ 動詞	スコア	出現頻度
通信教育	384.68	57	学ぶ	131.83	70
学び	164.63	38	できる	1.06	29
教育	63.91	35	いく	1.30	26
本学	230.99	30	思う	0.15	16
大学	13.57	29	おる	0.60	13
社会	18.73	23	受ける	1.54	11
学習	37.26	22	もつ	1.31	10
学生	10.52	19	持つ	0.29	10
皆さん	4.92	18	続ける	0.63	8
変化	13.06	17	くださる	0.13	8
知識	8.28	15	活かす	6.50	7
課程	70.07	14	求める	1.10	7
多様	39.59	14	働く	0.68	7
芸術	22.29	13	考える	0.14	7
あなた	2.25	13	支える	2.55	6
必要	1.49	13	目指す	0.90	6
福祉	28.65	12	開く	0.51	6
人材	22.48	12	いただく	0.25	6
分野	17.88	12	歩む	4.55	5
私たち	8.23	12	つながる	2.73	5
仕事	0.35	12	認める	1.01	5
知力	48.45	11	超える	0.53	5
未来	3.70	11	選ぶ	0.25	5
さまざま	30.21	10	わかる	0.05	5
自ら	6.90	10	めざす	6.08	4
オンライン	6.22	10	深める	4.16	4
いつ	0.66	10	高まる	1.58	4
取得	8.62	9	問う	1.00	4
実現	6.41	9	向ける	0.46	4
時代	1.14	9	進める	0.46	4
情報	0.94	9	直す	0.36	4
■ 形容詞	スコア	出現頻度	■ 感動詞	スコア	出現頻度
新しい	1.37	13	ようこそ	0.20	1
長い	0.29	5	---	---	---
大きい	0.27	5	---	---	---
高い	0.15	5	---	---	---
広い	0.33	3	---	---	---
美しい	0.23	3	---	---	---
深い	0.20	3	---	---	---
難しい	0.07	3	---	---	---
強い	0.04	3	---	---	---

図3 学長等のメッセージ本文の単語出現頻度

図3の学長等のメッセージ本文を分析した結果、名詞では「通信教育 (57回)」、「学び (38回)」、「本学 (30回)」等の単語が多く析出された。この点は、課程長等と共通していた。

このほか「社会 (23回)」、「変化 (18回)」、「人材 (12回)」といった単語が目立ち、授業の方法や学修の目的に言及していた課程長等と比較すると、より広い視点の通信教育観を語っている点が見られる結果となった。

動詞では「学ぶ (70回)」、「できる (29回)」が頻出語となったのは、課程長等と同様である。

■ 名詞 - ■ 動詞

名詞 - 動詞	スコア	出現頻度
通信教育 - 学ぶ	1.01	8
本学 - 学ぶ	0.28	4
扉 - 開く	1.71	3
いつ - できる	0.40	3
自由 - 学ぶ	0.17	3
知力 - 呼ぶ	3.00	2
知力 - 名付ける	3.00	2
目的 - 見合う	2.00	2
可能性 - 広げる	2.00	2
敬意 - 表す	2.00	2
仲間 - 作る	2.00	2
カリキュラム - 組む	2.00	2
身 - 付ける	2.00	2
影響 - 与える (否: 50.00%)	2.00	2 (否: 1)
勉学 - 励む	2.00	2

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
人々 - 暮らし	4.00	4
人材 - 輩出	3.00	3
人材 - 育成	2.40	3
知識 - スキル	2.00	3
教育 - 福祉	0.92	3
未来 - 芸術	0.86	3
社会 - 変化	0.67	3
未来 - 教育	0.33	3
放送大学 - 学び	0.31	3
本学 - 通信教育	0.21	3
慶應義塾 - 通信教育	0.21	3
大学 - 設置	2.00	2
さまざま - 領域	2.00	2
教育 - 普及	2.00	2
教育 - 意義	2.00	2

図4 学長等のメッセージ本文の係り受け解析

また、図4の係り受け解析では「通信教育／本学－学ぶ（合計12回）」が多かった点も、課程長等のメッセージと共通する結果となった。

他方で、課程長等との違いとしては、「人材－輩出／育成（合計6回）」など、人材育成方針に直接的に言及した表現が明確に析出された点が挙げられる。

このほか、「いつ－できる（3回）」、「未来－教育／芸術（合計6回）」など、「時間」について言及している点も、課程長等とは異なる結果となった。

全体としては、課程長等が「科目」や「スクーリング」、「資格」といった具体的な手段や「方法」を述べていることに対し、学長等は「社会」や「人材」などといった言葉で人材育成について言及していることが判明した。

4. メッセージの文章に現れた教育観

テキストマイニング分析の結果においては、特に課程長等のメッセージに上記のような「方法」という観点があることが判った。しかし、この分析方法において浮かび上がってくるのはあくまで単語であり、「方法」がどのように語られているのかといった文脈や、具体的な内容までを知ることはできない。そこでメッセージ本文を読み解く必要がある。

また予め述べておけば、「方法」という観点に着目して本文を読み込んでいくと、「場」というもうひとつの観点が浮かび上がってくる。

したがって、ここから先はメッセージ本文にみられる「方法」と「場」という2つの観点を整理していく。

4. 1 「方法」への言及の仕方

「方法」への言及としては、全体を通じて授業や単位修得の方法に関するものが多く表出していた。たとえば「レポート添削、スクーリング（面接授業）、メディアスクーリング（e-Learning）、卒業論文指導等」（法政大学・通信教育部長）、「メディア授業（E-スクーリング）や電子テキストの導入に加え、Web 会議システムを用いた研究指導を含め、ネットワークを用いたオンライン化をさらに進める／新たな技術・新たな手段を活用」（慶應義塾大学・通信教育部長）、「スクーリングやインターネットを柔軟に利用できる学修方法と単位修得方法」（日本大学・通信教育部長）などである。

さらには「Keio YouTube チャンネル」（慶應義塾大学・塾長）、「日本 e-Learning アワードでオンライン授業支援特別部門賞を受賞」（創価大学・学長／通信教育部長）、「最近では Zoom で顔を出して」（京都芸術大学・学長）といった、新しいプラットフォームやツールなどに関する言及も見られた。

こうした「方法」を「大学（課程）の特色」と位置づけているメッセージもある。「インターネットを利用して学位や各種国家資格取得を実現した通信制大学」（八洲学園大学・学長）や「オンライン大学」（ビジネス・ブレイクスルー大学・学長）、「対面授業と通信教育を融合させた体育・スポーツ系大学」（日本ウェルネススポーツ大学・学長）、「インターネットを活用した新しい大学」（東京通信大学・学長）、「ネットの大学 managara によろこそ」（新潟産業大学・学長）などの文章に見られるように、2000年以降に新設された大学の学長が、特にこうした点を多く語っている⁶。

「方法」の観点で整理をすると、学修支援や専門職などの人的なリソースの充実に関する言及も散見される。「各科目では担当教員による指導のほか、教育コーチと呼ばれるメンターが配置され、皆さんの学びを支援してくれます」（早稲田大学・教務主任）、「SNS なども駆使し、いつでもどこでも傍に寄り添った学習支援サポートを行っています」（環太平洋大学・学長）というように、学修支援の方法や専門職の配置状況を語っているメッセージがあることも明らかになった。

4. 2 「場」についての言及

通信教育を「場」と結び付けて語るメッセージでは、たとえば以下のようなものが

見られた。「最も「本来の大学」らしい学びの場」(中央大学・通信教育部長)、「いつでも、どこでも、だれでも、自由に学ぶことができる場」(佛教大学・学長)、「空いた時間に好きな場所で自由に学ぶことができる」(放送大学・学長)、「心の耕作を続けていく学びの場」(星槎大学・学長)などである。

また大学通信教育には欠かせない「スクーリング」を「場」と表現しているものとしては、「学友や教員が会う場として、対面のスクーリング講義などを設けています」(日本福祉大学・学部長)、「スクーリングでは共に学ぶ学生同士の仲間づくりにも役立つ貴重な場」(九州保健福祉大学・通信教育部長)など、出会いや仲間づくりの「場」として捉えているものが存在している。

さらに単語頻出数としては少なかったものの、「場」へのいざないとしての「扉」という言葉で大学通信教育を語っているメッセージが目をつけた。「学びの扉は、知の結晶をめざすすべての方々に開かれています」(放送大学・学長)、「日本福祉大学福祉経営学部の扉をたたいてみて下さい」(日本福祉大学・学部長)などがそれである。通信教育であっても、大学を「空間」として捉える文言や考え方も確認された。この点は代表者の教育観が現れている箇所と捉えると興味深い。

これらに見える、大学通信教育を「方法」や「場」として語るメッセージの象徴的な文章が、以下の日本大学のメッセージである。

日本の通信教育課程大学で唯一となる独自キャンパスが市ヶ谷に開設されています。同キャンパスでは、自習室・学生ラウンジが整備されています。更に、オンライン利用も可能な、様々な学習支援などの対応窓口なども開設されています。これらは、いずれも、日本大学教育憲章が掲げる「自主創造」、「教育の質保証」、「学生ファースト」という教育理念のもとに、学生一人ひとりが、学び・考え・道を拓く力を身につけ、それぞれの希望の実現を力強くサポートとするものとなっています。(日本大学・通信教育部長)

5. 考察

分析の結果をまとめよう。本研究では大学通信教育における人材育成方針の内実を明らかにするために、課程長等・学長等に注目して、テキストマイニング分析と本文を読み込む作業を行った。そこから浮き彫りになったのは、「方法」と「場」の2つの観点であった。

はじめに結論を述べると、本研究は、「方法」と「場」という2つのメタファーを通して、大学通信教育における教育観の「ねじれ」を可視化したと考える。どういうことか。

まず分析から見えてきたのは、ICT といった多彩な方法への語りであった。課程長等は学内の学修プロセスに注目しながら方法を語り、学長等は学外の社会を意識しながら方法を語っていた。こうした視点の違いはあるにせよ、両者は、多様な学習ニーズに対応するために多様な方法を語るという点では共通している。

この多彩な「方法」への語りを支えるのは、「場」のメタファーである。大学通信教

育には「場」のメタファーが溢れている。「場」は大学通信教育を実施する大学それ自体を指す場合もあれば、スクーリングを指す場合もあり、学習支援施設を指す場合もあれば、抽象的な学びの空間を指す場合もある。つまり大学通信教育は、通信教育を「場」のメタファーで表わしているのである。

しかし、おかしいではないか。大学通信教育が掲げる「いつでも、どこでも、だれでも」の理念とは、学びが「教室」に象徴されるある特定の場のみに生まれるものではないということを意味する。だからこそ、課程長等や学長等は、多彩な方法の語りを通して、通信教育の学びが「場」から解放されるメッセージを発してきたのである。しかしどういふわけか、他方で課程長や学長等は通信教育を「場」のメタファーで物語ってきた。

一方で「方法」によって「場」を相対化しながら、他方で「場」に固執するふるまい。ここに、大学通信教育における「ねじれ」を見いだすことができる。

6. 結論

では、この「ねじれ」とはなにを意味するのか。本研究の結論を以下の3点にまとめたい。

第一に、「ねじれ」とは教育観のそれを現わしている。本研究で見いだした「ねじれ」とは通信教育に特有なものではなく、大学教育全体の構造的な課題が象徴的に現われていると捉えることができるのではないか。教育の「方法」は多様に存在しており、また時代ごとに次々と新たな形で登場している。「OCW」や「MOOCs」、そして昨今では「メタバース」の教育利用が着目されていることなどからも、それは明らかである。しかし今なお、大学教育は自らを表象する際には「教室＝場」のメタファーから抜け出せていない。

第二に、こうしたメタファーは「ICT」への認識にも表れている。ICTは遠方の学修者がある空間へと誘いつなげる役割を果たす。しかしそれだけではない。ICTは遠方にバラバラにいる学修者を、バラバラなままに学修を可能にすることもできる。ICTは「集合」のためにも使えるが、「分散」を活かすためにも使うことができる。このようにICTには、本来、「集合」と「分散」の2つの役割があるにもかかわらず、ICTを「集合」の役割としてのみ認識した結果が「ねじれ」として現れていると見ることができる。

第三に、代表者のメッセージには、高度な教育実践能力を持った学修支援専門職の必要性を内包した表現が一部に見られた。以上の第一と第二の点を踏まえれば、学修支援専門職には、「ねじれ」の存在とICTの「2つの役割」を乗り越える方途がある。この2つを認識することによって、これからの学修支援専門職の望ましい在り方を探究する道が拓け、ひいてはそれが教育の「内部質保証」につながることになる。

学修支援専門職の望ましい在り方とは何か。そうした在り方への探究が、どのように教育の「内部質保証」へとつながるのか、といった点については、今後の研究課題としたい。

付記

本研究は一般財団法人放送大学教育振興会の助成(2022年度助成金、研究事業名「大学通信・遠隔教育における学修支援専門職養成ガイドブックの開発:FD・SDの観点から(2-1)」)を受けた成果の一部である。また本研究には「ユーザーローカル テキストマイニングツール」(<https://textmining.userlocal.jp/>)による分析を利用していることも併せて付記する。

注

- ¹ 「文部科学省告示第104号」(2007)改正の時点で、メディア授業告示においては「指導補助者」とその役割とが既に明示されている。
- ² 「かくて通信教育における指導教員としてのレポートの添削指導に当たる専任のインストラクターが通信教育部によって採用され、ここに所属した。その数は三十名に近いものであった。これで学部の教員による教育・指導を補い、迅速な添削指導を期す体制が整った。(奥井 1991)
- ³ この点に着目した先行研究には岡本(2015)が挙げられる。岡本は大学ウェブサイトにおける「学長挨拶文」に着目し、通信制の大学も含む、わが国の全大学(当時)を対象に、人材育成方針の分析を行っている。しかしこれまで、大学通信教育のみを対象とした人材育成方針や教育観の分析はされてこなかった。
- ⁴ 対象データの調査は2022年10月9日から19日までの10日間で閲覧・収集を行った。なお、本文中の引用は各大学のウェブサイトを参照している(URL省略)。
- ⁵ 一般的にテキストマイニングにおいては「スコア」が重要視されている。今回の分析結果においても「スコア」の算出値を併記しているが、本研究の全体的な考察においては単純な出現頻度の方を重視している。
- ⁶ 2000年以降にそうした語が多い理由のひとつは、独立通信制大学や新設の通信教育課程の設置が相次いだことが考えられる。

引用文献

1. 奥井晶(1991)『教育の機会均等から生涯学習へ—大学通信教育の軌跡と模索—』慶應通信株式会社。
2. 岡本崇宅(2015)「我が国の大学学長挨拶文にみる人材育成方針の考察—大学Webサイトの学長挨拶文全件調査—」『大学アドミニストレーション研究(第5号)』桜美林大学大学院 大学アドミニストレーション研究科, pp.1-16.
3. 文部科学省(2022a)「大学設置基準等の一部を改正する省令等の公布について(通知)」(https://www.mext.go.jp/content/20220930-mxt_daigakuc01-000025195_01.pdf)
4. 文部科学省(2022b)「令和4年度大学設置基準等の改正について—学修者本位の大学教育の実現に向けて—」(https://www.mext.go.jp/content/20220930-mxt_daigakuc01-000025195_05.pdf)
5. 山鹿貴史・古塚典洋・小暮克哉(2022)「大学通信教育におけるスクーリングの類型に関する考察—望ましい学修支援専門職養成を見据えて—」『八洲論叢(第2号)』八洲学園大学 pp.49-64.
6. Rorty, Richard M. (ed) (1967) *The Linguistic Turn: Essays in Philosophical Method*, University of Chicago Press.

(小暮 克哉 信州大学 総合人間科学系 講師)

(古塚 典洋 星槎大学 大学院教育学研究科 講師)

(山鹿 貴史 八洲学園大学 生涯学習学部 生涯学習学科 准教授)

2023年2月10日受理 2023年2月28日採録決定